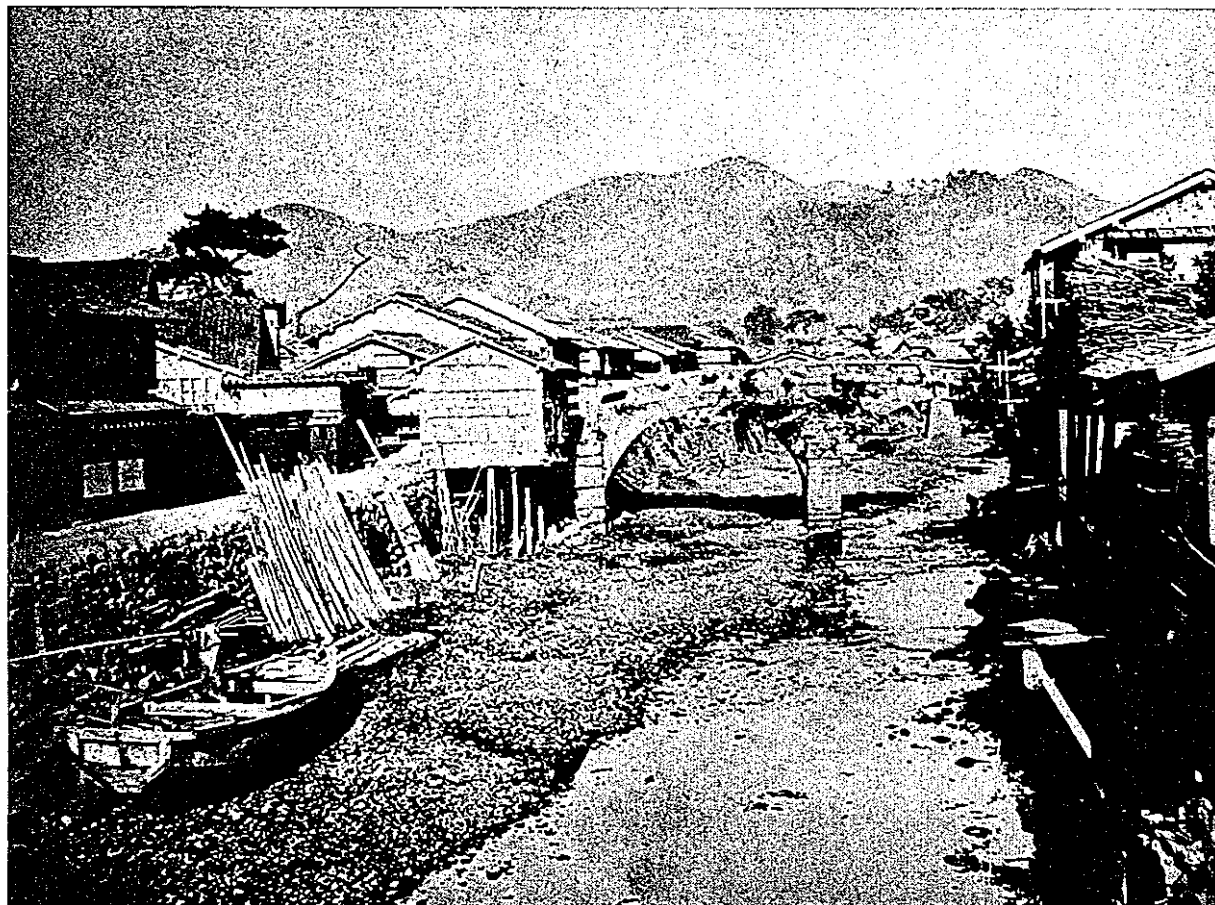


文化財めぐり

上野彦馬墓地と 風頭・伊良林地区の文化財

発行日 平成15年5月14日
発行所 長崎市魚の町5-1
長崎市教育委員会
生涯学習部文化財課
TEL 829-1193



眼鏡橋(上野彦馬撮影・長崎市立博物館蔵)

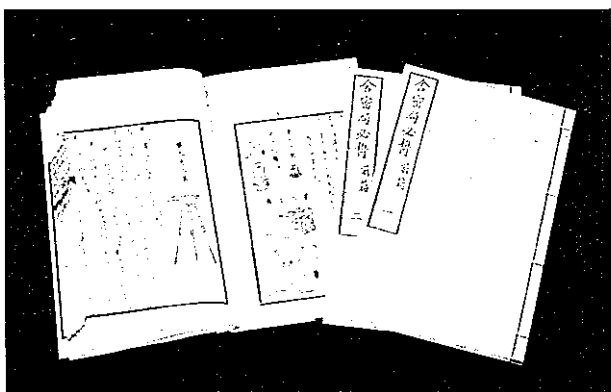
- 日時 平成15年5月18日(日) 10:00～12:00
- コース 風頭公園～上野家墓地～唐通事林・官梅家墓地～
阿蘭陀通詞加福家墓地～亀山焼窯跡～亀山社中～
上野彦馬宅跡～眼鏡橋(解散)
- 主催 長崎市教育委員会・長崎国際文化協会
- 共催 長崎伝習所
- 講師 長崎市教育委員会文化財課学芸員

上野彦馬

上野彦馬は、日本最初の職業写真家として広く知られています。彦馬は、御用時計師で蘭学者であった上野俊之丞の四男として、1838年(天保9)に長崎で生まれました。1853年(嘉永6)より日田の広瀬淡窓に学び、1856年(安政3)長崎に戻ってから、長崎医学伝習所でオランダ人医師ポンペに舎密学(化学)を学び、蘭書を通じて写真術の存在を知るにいたりしました。

写真術の習得は彦馬にとって容易ではなく、まず写真技術以前に撮影機材や現像用品の調達から始めなければならず、簡単に入手できないものは、彼自身の手で作らなければなりません。このような中、彦馬が伝習所で出会った津藩(現在の三重県)藩士堀江鉄次郎は、彦馬の良き共同研究者でした。二人はフランス人ロッシュェについて写真術を学び、鉄次郎の願い出により津藩の藩費でオランダ商人ボードウィンを通じて写真機を購入しました。

1860年(万延元)彦馬と鉄次郎は津藩主藤堂高猷の招きで江戸に上り、約1年の間滞在して屋敷に出入りする大名や旗本諸公を撮影しました。その後、彦馬は高猷公と共に津へ同行、藩校有造館で蘭語・化学の教鞭をとることになりました。彦馬はテキストとして、日本語の化学の教科書である『舎密局必携』を著わしました。これは多種の原書を参考・引用した名著で、全国的に利用され、明治の中頃まで関西を中心に化学の教科書として使われていました。



産能短大より復刻された『舎密局必携』

1862年(文久2)長崎に帰った彦馬は、中島川畔に撮影局を開設しました。幕末期には、坂本龍馬や勝海舟をはじめ多くの著名人や時代の風物を撮影、明治期に入ってから精力的な活動を続けました。1874年(明治7)金星が太陽面を通過するという現象が起こり、その観測のため日本に各国の観測隊が来日しましたが、この中の天文学

者ダビッドソンを隊長とするアメリカ隊の依頼を受け、長崎大平山で観測写真撮影を行いました。また、西南戦争の際には従軍写真師を務めましたが、これは報道写真の先駆けとして評価されています。

「日本写真術の開祖」として大きな足跡を残した彦馬は、1904年(明治37)に他界、享年67歳でした。

上野家墓地

皓台寺後山の最高部に位置し、上野彦馬や父俊之丞の墓碑を含む23基の墓碑が建ち並んでいます。彦馬の父上野俊之丞は、代々の絵師であり冶金術にも精通していた人物で、幸野家を継いで長崎奉行所の御用時計師も務めました。彼は、蘭館出入りの自由を許され、出島商館医や蘭学者などにオランダ語や蘭学を学び、西洋の知識を積極的に取り入れ、後に火薬の原料である硝石の製造も行っています。俊之丞の研究は多方面にわたっており、特に製薬業・中島更紗の開発・硝石の研究などに力を注いでいたようです。また、俊之丞は日本に初めて写真機械を輸入した人物としても知られます。上野家には多くの蘭学者が出入りしていたと伝えられ、このような学究的な家庭環境の中で彦馬が育ったことがうかがえます。

この墓域には、御用時計師幸野家の初代から五代までの墓もあります。もともと幸野家は初代吉郎左衛門の父良慶の時に上野家から別れた家と伝えられます。吉郎左衛門は、将軍家の大時計の修理を行ったことが知られています。

上野撮影局跡

上野撮影局は、1862年(文久2)に開設されました。これは、横浜の下岡蓮杖と並び、日本最初の営業写真館でした。1882年(明治15)には家屋を新築し、採光のために天井をガラス張りにした洋風のスタジオを設置しました。このスタジオは評判になり、「ビードロの家」と呼ばれていたそうです。



上野撮影局の台紙裏

唐通事林・官梅家墓地 (市指定史跡)

林公琰(福建省福州市福清県の人)を祖とする林家の墓で、昭和52年7月に市の史跡に指定されました。公琰と大村藩の森氏の娘が結婚し、その間に生まれたのが有名な唐大通事林道榮です。林道榮は、彭城仁左衛門とともに長崎奉行牛込忠左衛門に重用されました。その子三郎兵衛が早くに亡くなったため、孫の勝五郎の後見として官梅三十郎をつけました。官梅三十郎は、平井仁右衛門の子で三郎兵衛の娘婿です。三郎兵衛の子が林家を継ぎ、三十郎の子孫が官梅家となりました。両家の墓は、向かって右側が林家、左側が官梅家となっています。巨大な墓碑が20数基建っています。



阿蘭陀通詞加福家墓地

阿蘭陀通詞加福家墓地 (市指定史跡)

加福家はオランダ通詞の家系であり、始祖吉左衛門は1664年(寛文4)小通詞となり、1668年(寛文8)には大通詞となりました。吉左衛門はポルトガル語に巧みで、1639年(寛永16)ポルトガル人が国外退去になる以前よりポルトガルとの通訳であったと言われます。加福家は吉左衛門の後、八代にわたってオランダ通詞を勤め、三代喜七郎、四代喜蔵、五代安次郎、六代新右衛門は年番大通詞となっています。三代喜七郎は、1709年(宝永6)イエズス会宣教師シドッチが屋久島に漂着し、長崎を経て江戸へ送られる際に、江戸へ同伴し、新井白石の訊問に訳官を務め功績をあげました。

墓地内には、大小併せて29基の墓碑があり、中には寛文年間(1661~1672)の墓碑もほぼ原型のまま残っていることもあり、貴重な墓地のひとつです。

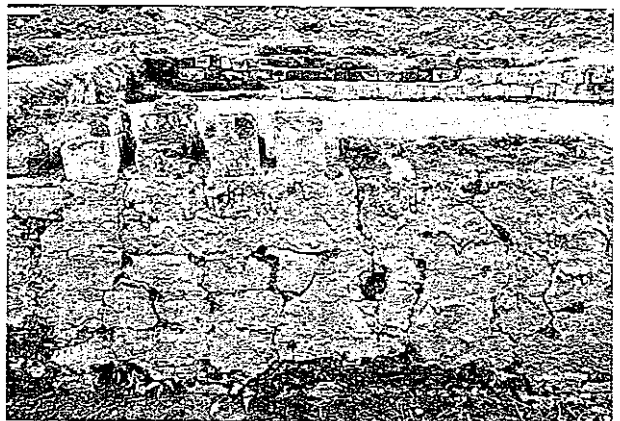
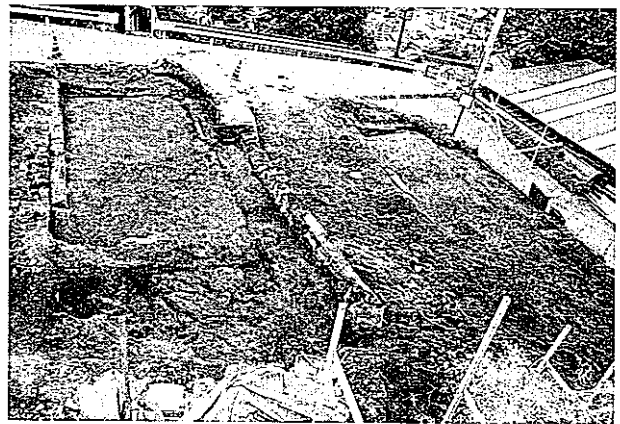
亀山焼窯跡

1807年(文化4)、長崎村伊良林郷字垣根山(現長崎市伊良林2丁目)に、八幡町の家持町人であ

った大神甚五平ほか三名の発起によって開かれた窯です。当初は、出島のオランダ人がたくさん水甕を必要としたことに端を発したことにより、陶器製作を行っていましたが、1814年(文化11)から天草陶石を使って磁器生産に着手しました。染付製品に使われた呉須は、中国からの輸入品でした。

亀山焼は優品として賞賛されていますが、一つには木下逸雲や春徳寺の僧鉄翁、三浦梧門らの画人や著名な文人墨客の絵付けによる製品があることにもよっています。製品は染付のほか、青磁や色絵磁器なども生産されましたが、変わったところでは、蘇州土亀山と呼ばれる製品があります。これは、一説には長崎港に入港する中国船がバラストとして船底に積んできた土を用いて製作したといわれる、灰色の地肌をした趣深い陶器です。このように、亀山焼窯は多彩な焼物を製作した窯でしたが、常に経営は苦しく、1865年(慶応元)にはついに廃窯となりました。

現在、亀山焼窯のあった地は宅地や駐車場に姿を変えていますが、一部に窯壁などが残っています。平成7年度、平成8年度に長崎市教育委員会などによる発掘調査が実施され、窯跡の一部が検出され、製品や窯道具が出土しました。



発掘調査による窯体検出状況

亀山社中跡

1865年(慶応元)、坂本龍馬とその同士たちによって結成された「亀山社中」の跡です。

神戸海軍操練所の閉鎖により行き場を失った龍馬らはいったん薩摩に出国しましたが、同藩重役小松帯刀の長崎出張に伴って長崎にやってきました(ただし龍馬自身は大宰府に向かい別行動をとっていました)。

「亀山社中」は、亀山焼の作業所であった建物を借り受けたと伝えられます。社中の構成員は土佐・紀州などの脱藩浪人や水夫たちで、その中には後に外務大臣になった陸奥宗光などもいました。社中の活動は、操練所で培った操艦技術を生かした海運事業、通商であり、さらには倒幕を目指した政治活動も行っており、様々な顔をもった団体でした。

1867年(慶応3)改編され、土佐藩附属の「土佐海援隊」となりました。

宮地嶽八幡神社陶器製鳥居(登録有形文化財)

有田磁窯による大型細工でつくられた鳥居で、1888年(明治21)製作。親柱部分に残る銘によって、製造人が岩尾久吉、角物細工人が金ヶ江長作、丸物細工人が峰熊一であったことが判明しています。明神系台輪鳥居で、高さ3.5m、幅4.3mを計ります。全体に染付による唐草文様が施されており、笠木木口に三つ巴文大1、小5が配されています。

佐賀県有田町陶山神社に同一製作者による鳥居がありますが、他に類例がない稀少な遺構として、平成9年7月、国の登録有形文化財になりました。

